

変わらない価値だからこそ

■出生率の高いまち

最近、岡山県奈義町の取り組みを紹介した書き物を読みました。鳥取県との県境にある人口6,000人ほどの小さな同町は、平成26年に合計特殊出生率2.81という驚異的な数値を記録したことで一躍有名になりました。

同町の子育て支援策を見てみると、出産祝い金、高校生までの医療費助成、子育てサポート環境の整備など、確かに数多くのメニューがありますし、子育て相談体制も充実しており、町ぐるみで子育て応援の雰囲気づくりが行われています。

また、子育て世代向けのデザイン性と機能性を重視した公営住宅も高い人気となっています。その他にも、一見すると、まちの規模には見合わないくらい現代美術館と図書館が整備され、子どもからお年寄りまでが日常的に交流できる環境づくりがなされています。

このような施策が出生率を引き上げた大きな要因であることは間違いないでしょうが、その背景にはもっと深いものがあると、その文章の中で指摘されています。それは、横仙歌舞伎という農村歌舞伎と子ども歌舞伎という伝統・伝承芸能の存在です。

■人々が帰れないまち

先日、民放テレビの番組で、福島県内の帰還困難地域の人たちの故郷を残そうとする取り組みが紹介されていました。帰ってはいけない場所となってしまった故郷をどのように後世に伝えていくのかとなったとき、ふるさとを可視化するものとして選ばれたのが伝統芸能でした。

「伝統芸能の継承を、何も知らない子どもたちに託すことの矛盾を感じながらも、故郷を残していかなければならない、絆を絶ってはならない、そのために伝統を繋いでいかなければならない」という指導者の言葉には悲壮感すら漂っていました。

■シンボルとしての伝統(伝承)芸能

先日、釜ヶ台番楽保存会の方々と意見交換する機会がありました。地区全体で、番楽の保存と活用について取り組まれていることを知りました。

その中でも特徴的だったのは、若者世代による新たな取り組みです。そもそも番楽をなくしてはならないという使命感から、「番楽をヒーローに」とのコンセプトを打ち出し、SNSを活用しての広報活動をしていこうと始められたもので、その効果もあって、最近ではいろいろなど

ころから公演依頼があり、着実に多くの人に番楽を見てもらう機会が増えているそうです。

市内には、釜ヶ台番楽のみならず、獅子舞や歌舞伎、神楽など、たくさん伝統芸能があります。私は、この民俗芸能には非常に大きな価値と可能性があると思っています。

私たちは、誰しも愛郷心を持っていません。その愛郷心を包含し、世代を越えて、その地域に暮らす人々を結束させるもの一つが、私は伝統芸能だと思っています。前述の帰還困難地域での取り組みがそれを明らかにし、伝統芸能が地域の人々の精神的支柱になりうることを岡山県奈義町が示し、さらには釜ヶ台番楽をはじめとする市内各地域の取り組みが正にそれを実践しているのだと思います。

だからこそ私は、伝統芸能を将来にわたり安定して継承していかなければならないと思っっているのです。そして、そこでは単なる保存・保護だけではなく、他の施策と連携しながら活用していくことが必要であると考えています。



にかほ市長
市川雄次

